

調査報告・ 県内の事例

学生
PICKUP
vol.3

佐野市日本語教室見学記

宇都宮大学大学院 大谷 桂子

■はじめに■

佐野市日本語教室は、1990（平成2）年1月29日に佐野市教育委員会によって佐野市立佐野小学校内に設置された。同教室には、2007（平成19）年度2学期の時点で、佐野小学校に在籍する児童と、他校に在籍する児童を含む15名が通級している。

この教室を担当する日本語教室指導員は、佐野小学校内で指導をするほかに、市内の外国人児童生徒教育拠点校（以下拠点校）を巡回して指導を行っている。佐野小学校自体は拠点校ではなく、佐野市日本語教室は市が独自に運営しているものである。児童生徒の通学手段が確保できれば（親に送迎をしてもらう場合がほとんどである）、拠点校以外の学校に在籍する児童も、佐野小学校内の日本語教室に通級することができる。

2007（平成19）年11月8日、佐野小学校内佐野市日本語教室の授業を見学させていただいたので、その見学記を以下に記す。

■2時間目（1年生4人）■

始めに国語の授業が行われた。授業では「～になると、～が、～になります」という文法を学習していた。子どもたちは実際に紅葉した葉を手に取り、先生と一緒に「あきになると、もみじの葉っぱが、赤くなります」などと繰り返し唱えていた。机上の学習だけでなく、物を使ったり声を出したりして視覚や聴覚に訴えることで、より日本語の文法が覚えやすくなるだろ

うと感じた。

次に算数の授業が行われた。ひとりひとり算数ドリルの問題を解き進めていた。日本語教室担当の先生のお話によると、計算問題も文章問題は解くことができない外国人児童が多いという。外国人児童にとっては、日本語の文章から式を導き出すということが私たちの想像以上に難しい。例えば「りんごが3つ、みかんが5つあります、あわせていくつになりますか」という文章問題を出されたとき、日本人児童は文章の中の「あわせて」という単語から足し算を思い浮かべるが、外国人児童にとってはそれが難しいのである。また、たとえ計算して数字を導き出すことができて、答えの欄に書く時に数字につける単位を間違えてしまうことが多いという。

■3時間目（6年生1人）■

1時間を通して作文の授業であった。児童が与えられた題は「修学旅行の感想」である。外国人児童に「～について作文を書きなさい」と突然言われても、なかなか書き進めることができない。そこで、担当の先生は作文に使う単語や内容に関する質問を提示することで、作文に書く文章を導き出す。例えば今回見学した授業では、「バス」「電車」「景色」「お土産」などの単語、「どこに行きましたか」「何をしましたか」「心に残ったことは何ですか」などの質問を挙げたプリントが児童に与えられていた。

この作文を書くための補助プリントは、担当の先生が市販の教材を参考にし、独自で作成し

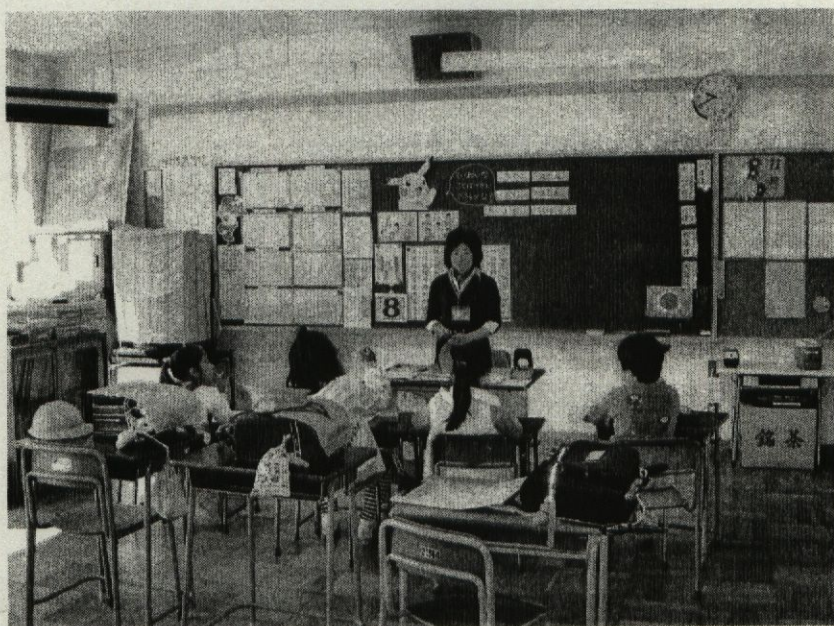
た物であった。授業を受けていた6年生の児童は、このプリントを参考にすらすらと作文を書いていた。ちなみに低学年児童の作文の授業では「～をしました」「～にきました」というように例文を埋めて作文を完成させるそうである。

■おわりに■

授業を見学し、また担当の先生の話をお聞きして、外国人児童が日本の学校で学習する時に突き当たる壁の一部分を知った。たとえ能力を持っていたとしても、日本語の理解によって算数の文章問題が理解できなかったり、作文を書くのが難しかったりすることがある。彼らに対する個

別指導の大切さと感じたと同時に、個別指導が必要にもかかわらず受けることができない子どもたちの将来が心配になった。

また、今回作文の授業では担当の先生が独自に作成した物を用いていたが、そのほかの授業では日本人児童と同じ教材を使用していた。担当の先生は、授業を行う中で「こんな教材があったらいいのではないか」と気づくことはあっても、自分で教材をつくる時間はなかなかとれないのだという。外国人児童を対象とした教材がもっと豊富にあって、日本人児童を対象とした教材と併用して授業を行うことができれば、担当の先生は日本語教室の授業をより進行しやすくなるのではないかと思った。



佐野市日本語教室で指導にあたる原田真理子先生